は Way-yārid の写音であって、「ワイによって助けられているもの」という意味の人名である。

「ワイ」とはアヴェスター語ワユ Vayu の転化したもので、風神、生の神、死の神、軍神など意味する。同様の名は中世ペルシャ語の文献にワタフラダート（王名）やワイボークト（神官名）として披見される。つまり「ワイ」を既存の「王」姓に充てたものである。

次の採薬師については、日本書紀の書記官が元来一名の人名を二分して二名の採薬師が来日した如く記載したのではないかと推察されるがその根拠を示す。

さらに楽人四人についてもイラン系の人である根拠を紹介する。

（1）京都大学・（2）弘前大学）

# 中川五郎治の種痘法の研究

## ——新しく発見された五郎治による被接種者——

松　木　明　知

北方系の種痘法として知られる中川五郎治の種痘法については、これまで種々論じられて来たが、彼の種痘法は、彼によって接種された者がいたことで実証された。

種痘術の弟子白鳥雄蔵の例は除外しても、最年長者の田中いく女以下数名の者のみが知られているにすぎない。

この事実は明治十八年函館県衛生課の小貫庸徳が種痘の事跡、主として中川五郎治に関連して管内を実地に調査して発見したものであった。

今回筆者は、小貫庸徳の調査で判明した以外にもう二人被接種者がいたことを確認した。これは青森の菊池武文の調査になるもので、明治十五年当時青森県に在住していたが、元来は松前の人で、一人は七十歳の女性、一人は四十歳の男性であった。女性は上膊に、男性は上膊と内股に瘢

痕があり、いずれも幼時中川五郎治に種痘を受けた痕跡であるという。

明治十五年当時七十歳、満では六十九歳であるから、この婦人は文化十三～四年生まれと推定され、このことから、中川五郎治の最初の種痘実施年代が、従来主張されて来た文政七年より前に遡る可能性も否定出来なくなった。詳細については追って本誌に掲載する。

（弘前大学麻酔科）

# 世界最初の麻酔関連死を巡って

## ――トーマス・ハーバートの症例――

松　木　明　知

昨年の本総会で筆者は、世界で最初のクロロフォルム麻酔死の事件ハンナ・グリーナー事件について発表したが、今回はそれより約一年前に発表したエーテル麻酔による世界で最初の麻酔死とも言うべき症例について、実地に調査し、当時の医学雑誌、地方新聞はもちろんのこと、死亡診断書も取り寄せ極めて興味ある事実を知り得たので発表する。

患者は一八四七年二月十二日英国のコルチェスター・エセックス病院で膀胱結石の手術を受けたが術後五十二時間で死亡した。

この死亡を巡って論議が交されたが、筆者は手術が行われた病院を尋ねて当時の記録を調査し、患者トーマス・ハーバートの生地も尋ねた結果を報告する。詳細は追って本誌に掲載する予定である。

（弘前大学麻酔科）